

『イエスがそこを出て、いつものようにオリーブ山に行かれると、弟子たちも従った。40 いつもの場所に来ると、イエスは弟子たちに、「誘惑に陥らないように祈りなさい」と言われた。41 そして自分は、石を投げて届くほどの所に離れ、ひざまずいてこう祈られた。42 「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください。』〔43 すると、天使が天から現れて、イエスをカづけた。44 イエスは苦しみもだえ、いよいよ切に祈られた。汗が血の滴るように地面に落ちた。〕45 イエスが祈り終わって立ち上がり、弟子たちのところに戻って御覧になると、彼らは悲しみの果てに眠り込んでいた。46 イエスは言われた。「なぜ眠っているのか。誘惑に陥らぬよう、起きて祈っていなさい。」47 イエスがまだ話しておられると、群衆が現れ、十二人の一人でユダという者が先頭に立って、イエスに接吻をしようと近づいた。48 イエスは、「ユダ、あなたは接吻で人の子を裏切るのか」と言われた。49 イエスの周りにいた人々は事の成り行きを見て取り、「主よ、剣で切りつけましょうか」と言った。50 そのうちのある者が大祭司の手下に打ちかかって、その右の耳を切り落とした。51 そこでイエスは、「やめなさい。もうそれでよい」と言い、その耳に触れていやされた。52 それからイエスは、押し寄せて来た祭司長、神殿守衛長、長老たちに言われた。「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持ってやって来たのか。53 わたしは毎日、神殿の境内で一緒にいたのに、あなたたちはわたしに手を下さなかった。だが、今はあなたたちの時で、闇が力を振るっている。』』

【説 教】

イエスさまは、祈りを大変大切にされました。弟子たちにいつも祈るようにとおっしゃられ、何よりもご自分が祈ることをとても大切にされたのです。特に、今日の聖書の言葉の中であるように、ご自分が苦しみの中に置かれたとき、祈りによって大きな危機を耐え抜かれて行かれました。

そのイエスさまの祈りではありますが、他の様々になされる祈りとはかなり違った特徴があります。それは何かと言いますと、イエスさまの祈りは孤独な時ほどその力を発揮するというものです。この場面では、確かに近くには大変親しいイエスさまの弟子たちが居ました。ここまで苦楽を共にしてきた兄弟姉妹とも言える弟子たちでしたが、しかし彼ら彼女らは悲しみのあまり眠ってしまったのだとあります。よって、イエスさまは一番自分が辛いとき、死という苦しみと向き合わなければならない時に、最後は一人で祈りを捧げなければなりませんでした。また、弟子たちの中にはユダというハッキリとイエスさまから離れて敵対するようになった者も出てきました。そのように人を信じるが出来なくなるような状況の中で、いったい神さまに向かってどう祈れば良いのだろうかと思ってしまうと思います。そういった、誰も助けてくれなくなった孤独な状況で、イエスさまはいよいよ切に祈られました。

実は、この人への信頼がなくなった状況こそが、神の助けを見いだせる最も良い時なのです。人と共に祈る共同の祈りというのは、確かにその人々の祈りによって慰められることはあります。これも大切です。しかし、本当に根の深い自らの生存を脅かすような問題と向き合わ

なければならない時というのは、一対一で神と向き合わざるを得なくなります。なぜなら、その根の深い問題は、人間には解決できないようなことだからです。人の限界を超えた死を前にしたときや自分の力ではどうにも出来ない事柄と遭遇したとき、それらの重い問題を神の御前に持って行くしか人には出来ません。そして直接神さまから答えをもらうしか、その苦しみから抜け出すことは出来ないのですね。

人々と距離をとらざるを得ない時というのは、神との距離を縮めることのできる最良の機会となります。この神とだけ直接差し向かって向き合うとき、人は初めて全身全霊で自分のすべてを出し切ってがむしゃらになることができます。ここでイエスさまがなされたように恥も外聞もなく、地面にひざまついて汗を吹き出し、一心不乱に苦しみもだえる姿を神の前にさらけだします。人が見ていようが見ていまいが、それだけ祈りに神に向かって夢中になっています。このとき、イエスさまはこう祈っています。「父よ、御心なら、この杯をわたしから取り除いてください」と。この杯というのは、死を前にした運命のことで、恐れや悲しみなど人間が経験するすべての苦しみのことです。もし、ここで他の人の目を気にしていたらどうでしょう。体裁を気にして、「私はどうなってもかまいません、あなたの御心を行って下さい」と言ってしまうかもしれません。しかし、イエスさまはそうは祈らずに、苦しみからどうか逃れさせて欲しいという人なら誰もが抱く当然の思いをも、神さまに向けられたのです。

イエスさまの祈りの本質は、この嘘をつかないというところです。他の人に対しても、自分に対してもそして何よりも神さまに対して嘘をつかない、これがイエスさまのお祈りの特徴です。私たちは人生の中で沢山悲しいことに出会います。不安や恐れをいつもどこかに抱えていますし、うまく行かないことの方が多くて愚痴をこぼしたり、後悔したり、投げ出したくなることもしょっちゅうあります。「ああ、こうなってくれたら、どんなに良いだろう」と、自らの願望をいつも思い描いていると思います。それらのものたちが私たちの人生と切り離せないのと同じように、イエスさまの祈りというのはそのような私たちの一部を切り捨てることはありません。その決して褒められないようなところであっても祈りの中に入れて、信仰の一部として受け止めて下さいます。イエスさまは、小さい子どものようにならないと、神の国には入ることは出来ないとおっしゃったことがあります。小さい子どもは自分を取り繕うということが出来ませんので、丸ごとそのままの自分で向かって行くしかありません。苦しかったら苦しいと弱音を吐き、悲しかった悲しいとワンワン泣きます。神さまの前でそれが出来るか出来ないかで、神さまと近づけるかどうかが決まってくるのだというわけです。

イエスさま、ここで父よと祈っています。これは、元々のイエスさまの言葉では、「アッバ」でありました。これは、小さい子どもが父親を呼ぶときの呼び方です。イエスさまはここで幼子に戻って、神さまのみ手の中にご自分の恥ずかしいところも、信じる心も、どれも捨てることなくすべてを委ねられました。このみ父の腕の中に抱かれることで、イエスさまは死の苦しみの杯を飲むことを、なんとか抜けて行くことが出来たのですね。不安や恐れがあるのがいけないのではなく、それを一人で抱えることが人間の限界を超えているのだということです。人は元々、小さな子どもとしてアッバの神さまにすべてを持って行くように、そのように造られているのですね。アッバと幼子の関係として人生を歩む姿、これが一番人間の良い状態だとい

うことです。イエスさまの祈りは、その本来の人間の姿に私たちを戻してくれます。

そして、このイエスさまの祈りは、常日頃からいつでも祈れるように、「主の祈り」として与えられてもいます。主の祈りは、「天にますます我らの父よ」と始まりますが、これも元々は「アッパ」と呼びかけていました。そして、「御心の天になるごとく、地にもなさせたまえ」と続きますが、これがここでの「私の願い出なく、御心のままに行ってください」にあたります。そして、主の祈りの最後の所に、「我らを試みに遭わせず、悪い者から救って下さい」とありますが、これが「この苦しみの杯を取り除いて下さい」と同じことを指しているということです。この主の祈りを唱えることを通して、普段からどんな小さな辛いことや辛いことでも、揺れ動いてしまう自分の姿と祈りの中で向き合っていきます。そこから逃れたい、嫌なことを避けたという思いと、でもこの苦しみの中にも神さまのみこころがあるかもしれない、じゃあ向き合ってみようという思いとで葛藤いたします。そのもがいている姿を隠さずに、アッパの神さまにお祈りをして行く中で、自分が進むべき道が開かれて行くのですね。

主の祈りは、特にパンを得る大変さと、そして人を赦して和解しようとする人間関係の苦しさが、普段から取り組むべき課題として挙げられています。健康で生活することも生活を成り立たせるものの中の課題としたら、この二つの事柄は私たち人間のすべての生活の問題を包括しているものとして考えられると思います。つまり、イエスさまの祈り、主の祈りというのは、私たちの生活のすべてを丸ごと、神さまのみ手の中に放り込んで、その祈りの中で生活するようになると導くものなのです。イエスさま以前のそれまでの祈りというのは、生活の一部として、信仰とか祈りというのは付け足されていました。イエスさまの新しさは、それをひっくり返して、祈りの中に、信仰の中に、生活の方をその一部として中に入れたことです。ですので何をしても、うまく行こうが行くまいが、すべてのことが神さまのみ手の中であって、そのイエス・キリストの祈りの中で私たちは生きているんですね。たとえば、生活費を稼ぐことを優先しすぎたあまり、家族や他の人との関係がぎすぎすするようになってしまったとか。逆に、人とのつきあいを気にするばかりに、あの人は嫌いだ、一緒に居たくないという思いでいっぱいになって、何をしても集中できない、最悪仕事を辞めたとか。そのようなことになりかねません。イエスさまの祈りの中で生きることで、これらのバランスを崩したものを立て直すことが出来るのです。この祈りの中で、日々の生活を送って行くことで、いざというときの大きな人生の危機に直面したときに、そう慌てることなく、その苦しみと向き合っていくことが出来るようになると思います。鉄のような硬い意志で、どんな苦境も乗り越えられるというわけではありませんが、柳のような柔らかさでしなやかに、泣いたりわめいたりしながらも、苦しみをいなしながらなんとかくぐり抜けて行けるというわけです。「柔和な人々は幸いである。その人々は地を受け継ぐ」とある通りです。

そして、そういう風に祈りの中で鍛えられた人というのは、イエスさまがこの場面でそうだったように、劔や棒で脅したり痛めつけても、本当には言うことをきかせることはできません。暴力や圧力で屈服させることの出来ない心を養うことが出来るわけです。神さまの守りの中で、そのキリストの祈りの中で、聖なる力というものを体験してきた人というのは、人間の限界のある力はそんなに怖くないとわかってしまいます。一時的に言うことを聴かすことは出来たとし

ても、それを永遠に変わることのない信頼などにすることはできません。実際にイエスさまを捕まえて殺してしまっても、それでイエスさまに従うものたちを無くすことが出来ませんでした。返って強い力に屈さなかったその信仰とは何か、その祈りとはいったいどういったものかと、イエスさまに従う人々は増えていってしまいました。ですから、途中で殉教者を出さないような政策に変わったのです。殉教者を出すと、返って信仰者は増殖して行ったからです。これは、日本では江戸時代に行われた「踏み絵」がわかりやすいと思います。踏み絵を踏んでしまっても、それは信仰を捨てたわけではありません。怖かったり、痛いのを耐えられないという姿も信仰の中に、イエスさまの祈りの中に含まれているからですね。だから、踏んでしまっても、また赦されてもう一度起き上がれます。自分があきらめさえしなければ、何度でもキリストの祈りによって起き上がられます。

剣や棒よりも強い人間の最大の武器というのは、このキリストの祈りに支えられている折れない心です。たとえ折れてしまっても、また再起させてもらえるその心は、誰にも手に負えず、最もやっかいな霊的な武器なんですね。ですからキリスト者は、剣や棒を持つ必要はなく、人を傷つけることなく、人々の心の変えて行くことを通して、世界を平和に導くことが出来るのだというわけです。

イエス・キリストの祈りの中で生きることが出来ることに感謝し、その祈りに導かれて一人でも多くの方々に、生活の不安や苦しみから抜け出してもらえるように、この福音をお伝えして行きたいと願います。